

# 小学生における通塾と日常生活・心身の健康との関係

A96—4443 宮崎里美

(指導教官：朝倉隆司)

## 1. 目的

①小学生の通塾状況・学校や学習塾に対する意識を把握する。

②通塾が児童に与える影響・問題点を、児童の生活意識や就寝時刻、疲労感などから検討し、今後の学校教育の課題について考察する。

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象者

東京都内にある公立小学校3校の4・5・6年生を対象とし、内訳は4年生101名、5年生144名、6年生140名、合計385名である。

### 2) 調査方法

無記名・自記式の質問紙調査で、調査の統計処理にはSPSSを使用した。各項目間の関係について、 $\chi^2$ 検定、クルスカル・ウォリス検定を用いて検討した。

### 3) 調査内容

①基本的属性②一週間の生活習慣③通塾の有無④学習塾に通うようになった理由⑤現在学習塾に通っている理由⑥学習塾に通わない理由⑦学校や学習塾に対する意識(評価)⑧学習塾が児童に与える影響(食事、就寝時刻、日常生活における疲れなど)

## 3. 結果と考察

### 1) 通塾率について

調査対象とした小学生の通塾率は55.1%であり、半数を超えた。通塾率には性差・学年差はみられなかったが、学校差が大きく、それぞれの地域・学校の特徴が、通塾率に大きな影響を与えると思われる。

### 2) 中学校受験と学習塾が児童に与える影響

中学校を受験するつもり児童は全体の29.6%であったが、通塾している児童では48.1%、通塾していない児童では7.0%と、大きな差がみられた。

受験するつもり児童は、現在学習塾に通っている理由は「中学校受験のため」が最も多く、塾に通うきっかけとなったのも「将来いい学校に入りたい」が多かった。一方受験するつもりのない児童は「学校の授業の予習・復習のため」に塾に通っており、きっかけは「学校での勉強が分からなかった」「まわりの友達が行っていた」という児童が多かった。しかしどちらにも共通して言えることは、嫌々学習塾に通っている児童はほとんどいないということである。きっかけは親に進められたとはいえ、自分も行く気になった、また約5割は自分から行きたいと思って学習塾に

通うようになったのである。したがって、学習塾に嫌々通うことが精神的負担になり、健康に悪影響を及ぼすといことはほとんどみられなかった。むしろ通塾によって、児童たちは勉強の仕方を学んだり(63.9%)、新しい友達ができたり(62.3%)して良い影響がみられた。

しかし一方で、友達と遊ばなくてつまらない(47.1%)帰宅したときひどく疲れを感じる(48.5%)、次の日まで疲れが残る(26.9%)などの悪影響も認められた。また、塾に通っている児童の約半分が塾からの帰宅時間が8時を過ぎており、就寝時刻も10時を過ぎる児童が84.3%もいるなど、全体的に遅くなっていた。しかも、就寝時刻は塾のない日であっても、塾に通っていない児童に比べると遅く、遅い時間まで起きていることに体が慣れて、習慣化しているように思われる。(図1参照)

日常生活の疲れとの関連で見ると、一週間に何日も塾に通っているから疲れがたまるわけではなく、通塾している児童が疲れを感じる原因は「学習塾が楽しくない」「帰宅時間、就寝時刻が遅い」ことであつた。なお、もう学習塾に行きたくないと感じている児童はわずか15.1%であったが、その要因は「疲れ」と共に、「友達と遊べない」ことであると考えられた。

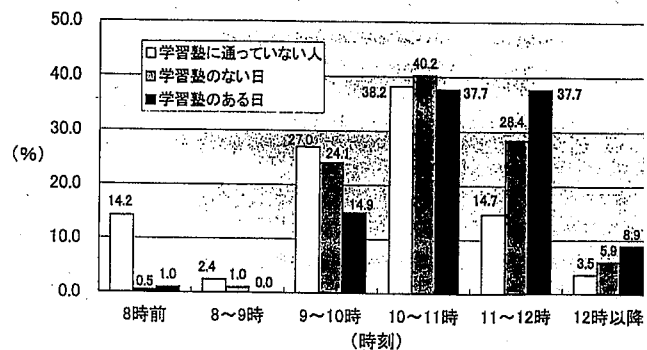


図1. 就寝時刻の比較

## 4. 結論

約5割の児童が通塾しており、通塾している児童は帰宅時間や就寝時刻に遅れがみられ、疲れを残す要因となっていると思われる。しかしそれを児童たちは必ずしも認識できていないため、気付かないうちに疲れが積み重なって体調を崩すことにもなりかねず、周囲の注意が必要である。また、学校教育では、児童たちが少しでも友達と一緒に遊べる機会を多く確保するなどの工夫が必要であろう。

## 5. 主な参考文献

「現代小学生の生活と意識」1991、NHK世論調査